

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：28002

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19769

研究課題名（和文）要介護高齢者の社会貢献による生きがいを推進する看護実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a nursing practice model in which the social contribution of older people requiring long-term care is used to promote their motivation in life

研究代表者

砂川 ゆかり (sunagawa, yukari)

沖縄県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：00588824

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、要介護高齢者の社会貢献への支援を行い、その関わりにおけるケアリングから、要介護高齢者の社会貢献による生きがいを推進する看護実践モデルを開発することである。導かれた看護実践モデルは、看護師は【苦悩に寄り添い共揺れ】することにより信頼関係を得ることを出発点としていた。そして、【真のニーズを捉える感受性】を研ぎ澄まし、【取り巻く人々の力を借り実践の継続】をすることでその人らしさを見だし、【当事者は実践を磨く協奏者】として共にケアを創造するという、らせん状の発展段階を得て、社会貢献への意思の表出につなぐものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の意義は、要介護高齢者が社会貢献できる存在であることを実証的に示した点である。そして、看護職者の活躍の場が要介護高齢者の治療の場だけでなく生活の場まで広がっている今、看護職者が従来の看護実践に加え、要介護高齢者の社会貢献をも支援できるよう、要介護高齢者の社会貢献への支援を推進する看護実践モデルを示した点である。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to develop a nursing practice model in which the social contribution of older people requiring long-term care is used to promote their motivation in life, based on the care provided to them while helping them to make social contribution. The derived nursing practice model showed that the starting point for the nurses was establishing a relationship of trust by “being close to the older people’s distress”. Then, nurses enhanced their “sensitivity to true needs”, found the older people’s personality by “continuing nursing practice with help from the people around the older people”, and created care with those people on the idea that “everyone involved are collaborators in improving practice”. Implementing these spiral developmental stages leads to the expression of older people’s will to make social contributions.

研究分野：老年看護学

キーワード：要介護高齢者 社会貢献 看護実践 ケアリング

1. 研究開始当初の背景

我が国のめざす“地域共生社会”は、ノーマライゼーションの理念や完全参加と平等の実現に向かうことであり、要介護高齢者を含めたすべての高齢者が相互に支え合う構成員として期待されなければならない。しかし、要介護高齢者は、社会貢献の場や機会の活用を望んでいても移動手段がない、家族の理解と協力が得られないことによりエンパワーメントされにくい（**淵田, 2004**）“年なのでやりたいことは何もない”と要介護状態での社会への参加ニーズは表明されにくい（**田場, 2012**）との報告がある。このように、要介護高齢者は、心身機能の低下や迷惑をかけたくないなどの理由からやりたいことを諦めやすい状況にある。地域共生社会の実現に向けて、要介護状態であっても、支援により社会貢献する存在になることが必要である。

高齢者の社会貢献への支援に関する先行研究は、自立高齢者がほとんどであり、要介護高齢者の社会貢献は支援されていないことへの問題提起（**Kenbubpha, 2018; Foster, 2015**）がみられた。自立高齢者における社会貢献への支援は、取り組みの効果と継続性の観点から、個別性を考慮した個別支援の必要性（**Guell, 2018; Van, 2016**）、高齢者が主体的に活動に取り組めるよう、モチベーションを引き出す支援の必要性（**Stathi, 2020; Rantanen, 2019**）が述べられている。したがって、やりたいことを諦めやすい要介護高齢者においては、個別支援によってモチベーションを引き出す看護実践が特に重要と考える。

要介護高齢者の社会貢献を推進する看護実践とは何か。野口（**2002**）は、看護実践とは、「人々の主体性を尊重して行われる相互作用である」と患者と看護師の関わりを重視し、高齢者への看護実践は「客観的・科学的であることよりも、高齢者の主観と対話しつつ、高齢者が自己を創造し続け自己を貫いて生きることを支援することが必要」と述べている。つまり、要介護高齢者の社会貢献を推進する看護実践とは、要介護高齢者の社会に関与したいという主体性を尊重して、看護師が要介護高齢者と関わることにより、要介護高齢者が社会貢献する自己を創造し続ける支援であると考えられる。

社会貢献する自己を創造し続けることの支援を、成長すること、自己実現することを支えることと捉えるならば、ケアリングの概念に着目する必要がある。**Watson (2012/2014)**は、ケアリングについて、看護師の姿勢・態度・意識を出発点とし、患者と看護師が間主観的に関わるプロセスのなかで、目標達成に向かう状態と述べている。要介護高齢者が社会貢献する自己を創造するという目標達成に向かう状態、すなわち自ら社会に関与したいというモチベーションをもち社会貢献への意思を表出するまでには、要介護高齢者と看護師との関わりにケアリングが見出されるであろうと考えた。ケアリングの概念は社会的存在である人間が、その時その時の社会環境が求める看護の在り方に合わせて作り上げてきたとされる（**石垣, 2015**）。したがって、地域共生社会において、社会環境が求める看護の在り方に向かうためには、これまで着目されてこなかった要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリングを記述することが重要と考えた。

2. 研究の目的

研究の目的は、要介護高齢者の社会貢献への支援を行い、その関わりにおけるケアリングから、要介護高齢者の社会貢献による生きがいづくりを推進する看護実践モデルを開発することである。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン

研究デザインは、アクションリサーチである。要介護高齢者に看護師である研究者（以下、看護師とする）が社会貢献への支援を実施するプロセスにおいて、ともにケアリングを生成することで、要介護高齢者の社会貢献への意思の表出をめざすものとした。看護師は、先行研究（**伊牟田, 2015**）において、要介護高齢者の社会貢献活動の様相を捉えた経験があり、活動を具体的に予測できることから自分が支援者となることを選択した。

2) 概念枠組み

要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリングは、看護師が要介護高齢者のモチベーションの変化をわかる体験として記述する。記述は、**鯨岡の考案した方法 (2005)**を参考にし、その記述内容から社会貢献を推進する看護実践に大切なもの（メタ意味）として高齢者のモチベーションの変化に与えた看護師の関わりの意味を取り出す。そして、ケアリングが見出される出発点となった看護師の姿勢・態度・意識の観点から看護実践モデルの作成を試みる。なお、社会貢献への意思の表出の判断は、社会貢献が行動として体現された時を看護師が捉えることで意思が表出されたとした。

3) 研究参加者

研究フィールドは、Y 看護小規模多機能型居宅介護事業所、Z 定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所の2事業所とした。管理者に対し、他者のために役割が果たせそうだが、見出せていない者の紹介を依頼し、4名の要介護高齢者が紹介された。看護師は、同行訪問を行い、選定基準であるモチベーションを高めることにより主体的な社会貢献が見出せる可能性のある者、かつ、言語的・非言語的コミュニケーションにより意思の表出が捉えられる者を選定し4名が研究参加者となった。

4) データ収集・生成・分析

(1) データ収集

自宅や事業所に訪問して介入を行った。介入において看護師は、主観的内的世界を持つ存在と

して要介護高齢者を尊重し、感情の表出を許容し、その人にとっての物語を理解しながら、要介護高齢者のつながりのある他者やその関係性を把握して潜在的なニーズを捉えていった。1事例につき、調査期間は2ヶ月～4ヶ月、訪問回数は12回～23回、1回の訪問時間は60～90分であった。会話は、研究参加者の了解を得てICレコーダーに録音した。それを逐語録におこし、要介護高齢者の言動、看護師の思考や感情、実施した看護実践とその振り返り、および今後の計画を記録した。

(2) データ生成

看護師が要介護高齢者のモチベーションの変化をわかる体験の記述は以下の手順ですすめた。

看護師が要介護高齢者のモチベーションの変化を捉えた出来事を定める。看護師は出来事のなかでどんな体験をしたのか、感じ取った情動とはどのようなものだったのかを問い記述する。記述内容から、要介護高齢者と看護師の関わりの前提とは何か、要介護高齢者と看護師との関係とはどのようなものかを問い、関わりの背景を書き出す。記述内容と関わりの背景を熟読し、なぜこの出来事を取り上げたいのかを中心として、看護師はどのような意識体験をしたのかを問い、看護実践に大切なもの(メタ意味)を記述する。データ生成は、④記述内容、⑤背景、⑥メタ意味それぞれについて、看護師の体験を中心に作成した。信頼性を担保するために、記述内容は共同研究者と精読し、なぜ看護師はそのような言動をしたのか? 要介護高齢者の反応に看護師はどう思ったか、どう感じたか?などの質問を繰り返し、加筆修正を行った。その際、看護師は、記憶だけでなく逐語録を読み返し回答した。一方、共同研究者は看護師の回答について、看護師のこれまでの行動傾向、思考傾向などからみて了解可能かを吟味した。

(3) データ分析

データ分析は以下の手順ですすめた。要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリング: ④記述内容、⑤背景を熟読し、「要介護高齢者と看護師はどのように関わるか、関わるなかでどのように作用するか」の問いをかけ、キーセンテンスを作成、類似したものを集めてサブカテゴリー化、カテゴリー化した。社会貢献を推進する看護実践に大切なもの: ⑥メタ意味を熟読し、「モチベーションの変化をわかる体験として大切なものとはなにか」の問いをかけ、要介護高齢者のモチベーションの変化に与えた看護師の関わりの意味についてのキーセンテンスを作成、類似したものを集めてサブカテゴリー化、カテゴリー化した。看護実践に大切なものから、看護師の姿勢・態度・意識を示すキーワードを中核として取り出し、支援に見出されるケアリングとの相互関係を共同研究者と討議し配置、図式化した。以下、キーセンテンスを“ ”、サブカテゴリーを《 》、カテゴリーを《 》、中核を【 】で示す。

5) 倫理的配慮

本研究は所属大学の研究倫理審査委員会の承認(承認番号20019)を得た。研究への参加は自由意志であり途中辞退も可能である、現在受けている介護保険サービスとは全く別のものであり断っても不利益にならない、情報は本研究以外の目的で使用しない、公表の際は個人が特定されることのないよう配慮するなどを文書と口頭で説明し同意を得た。

4. 研究成果

研究参加者4名の看護師が要介護高齢者のモチベーションの変化をわかる体験の記述は、1人4～6場面、合計40場面であり、すべての者に社会貢献への意思の表出が見出せた。

1) 要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリング

要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリングは、35キーセンテンス、9サブカテゴリーから《互いを受け入れ関わり合うことで“今の”自己を発見する》、《互いの力を信じ補いあい活動を喜ぶ》、《一体感を醸成し老いによる孤独が昇華される》、《自己への信頼から他者への貢献が発動する》の4カテゴリーが導かれた(表1)。

C氏は他利用者をケアできる存在として自身のことを認識しておらず、関わりを諦めている様子があった。看護師は、C氏が行う他利用者への声掛けは、相手への気遣いと当事者ならではの共感に秀でており、相手の気持ちを動かす力があると捉えていた。そのため、C氏をケアできる存在として認識し、他利用者の困りごとを相談する仲間とした。C氏は、大声を出すなどの問題行動のある利用者には特に関わろうとしなかったが、看護師が関わる糸口をつくることで、相手の行動に理解を示しながらコミュニケーションを工夫していった。そのようにC氏と看護師は繰り返し、協働でケアする成功体験を重ねた。その日も、C氏と看護師は、相棒の感覚を持ちながらデイルームに向かった。さっそく他利用者が大声を出し、方言で帰宅願望を訴えていた。C氏は、その他利用者に誰も関わらない様子を見て、「話し相手がいないのよね…。私、話をしてみようかな?」と私のほうをしっかりと見て発言した。C氏が自分から動き出そうとするのは初めてだったので驚きながらも、C氏の自信を感じたので、間髪いれずに「ありがとうございます!」と応じた。C氏は「(他利用者は)目が見えないから短気になりやすいけど、少しでも方言でお話したら和らぐんじゃないかと思って」と方言が話せない看護師を補い、他利用者の方に方言で話しかけていた。

この場面における、支援に見出されるケアリングは、“高齢者は、方言で話すことができない看護師を主体的に補い、看護師との相補関係の中でケア力を自覚し、ケアの担い手としての主体性を確立する”という行動できる自覚から主体的に他者への貢献が発動する、《自己への信頼から他者への貢献が発動する》であった。

表1 要介護高齢者の社会貢献への支援に見出されるケアリング

カテゴリー	サブカテゴリー	キーセンテンスの例	
互いを「今の受け入れ」自己を「今」の受け入れ合つて見出すこと	互いの態度を受け入れ、関わり合う気持ちを確かめる	A-1 看護師は、訴えを軽んじられ、不満から緊張を高める高齢者を察知し、訴えに応答しながらその場に居続けることで働きかけ、高齢者は、目の前に居続ける看護師の存在を認知したことで緊張がほぐれる	
		D-1 看護師はニーズを実現するための活動（障害体験の発信）を持ちかけ、高齢者は、繰り返し人間関係に挫折した体験をもとめせず、看護師との信頼関係を醸成していく	
	現状に留まりたい気持ちと挑戦したい思いが葛藤する	B-1 看護師は、高齢者の母親に会いたい気持ちを認めた敗北感を覚悟しつつ実践を提案し、高齢者は実践できない理由を述べて安定を保とうとしながら、看護師の踏み込みに感謝する気持ちとの間で葛藤が立ち現れる	
		A-3 看護師は、他利用者への関与を拒否し看護師との関係に留まろうとする高齢者に、他利用者と関わる糸口をつくることで、高齢者が他利用者へ関与し、関与され、交流の心地よさへの意欲を再生する	
	関わり合いを通して互いの自己を発見する	B-1 高齢者は、看護師を介して家族への関心を出したことで、若い頃の家族との交流を想起し家族に対する貢献したい思いを認知する	
		A-3 看護師は、高齢者が体験している老いによる孤独を感じ、高齢者が老いを楽しむケアへの希求が高まる	
互いの活動を信じ、喜びを補いあひ	高齢者の役割発揮に気づき喜び合う	C-1 高齢者は、看護師の困り事を察知し、ケアに抵抗する他利用者と共に共感しつつ活動を動機づける話力を発揮し、看護師は、高齢者のケア力に気づきフィードバックすることで、老いを共有できる強みをケアに活かす喜びを発見する	
		D-2 看護師は、ニーズを実現するために活動（障害体験の発信）する手段を手に入れた高齢者の躍動を受け止め、具体的な活動を補助しながら、高齢者は主体的にできることを増やし自己の可能性を探っていく	
	互いにできることで補い合い活動する	B-2 看護師は、外出を支援するための介護技術習得に専心し、高齢者は、高齢母親との面会のために、我が身を呈して看護師の介護技術習得を助け、その中で看護師の成長を実感し、活動の実現可能性へ期待が高まる	
		C-3 看護師は、取り戻した自信を再び見失っている高齢者を、ケアの担い手として巻き込み、高齢者は、看護師の意図を認知しケアに関与し、自信を醸成していく	
	一体感を醸成し老いによる孤独が昇華される	互いの力を認め合い一体感を醸成する	B-2 看護師は、ケア提供者の支えを得ながら高齢者の介助を引き受ける責任を覚悟し、高齢者は、看護師に身を委ねることを決心したことで、目的を達成するために協働するチームとしての一体感を生成する
			C-2 看護師は、高齢者がケアの必要な他者に気づき、老いを共有できる強みをケアに活かす力を認め、ケアの担い手として巻き込み、高齢者は、自らのケア力に気づき、見失っていた自信を取り戻し、補い合う関係を育む
老いによる孤独の共感から今を楽しむ積み重ねを実感する		A-4 看護師は、老いによる孤独をかかえる高齢者が、他利用者とは交流できるような糸口をつくることで、高齢者がその人らしさを発揮しつつ、老いを楽しむ経験を重ねる	
		C-3 看護師は、高齢者が、自分の思いとは異なる子どもの提案を親孝行と受け入れる中に、高齢者の老いの孤独を認知し、今を楽しむ経験の積み重ねを模索しながら活動し、高齢者の楽しみが萌芽する	
活動の伴奏者を得て老いによる孤独を共感できる仲間を獲得する		D-4 高齢者は、死を待つだけという老いの内的体験から、活動を通して実感している生き抜く力の躍動を看護師と共有し、喜びに浸る	
		B-3 高齢者は、母親に会いたい気持ちを成就させた体験を通して、老いや障害の苦しみと向き合える力を自覚し、看護師はその力を認め共有できていることをフィードバックし、互いに確かめ合う	
自己への信頼から他者への貢献が	行動できる自覚から主体的に他者への貢献が発動する	A-5 看護師は、個人的に活動を楽しむ高齢者に、他者への関与を促し、高齢者は、自ら交流したい他者へ働きかけ、行動できることを自覚したことで他者への貢献意欲が発現する	
		D-5 高齢者は、ベッドから出ることができない暮らしの中に、看護師の協力を得て活動を創造したことで、主体的に交流したい他者を見だし、関与するためのアイデアを発揮し自らの活動を味わう	
		C-5 高齢者は、方言で話すことができない看護師を主体的に補い、看護師との相補関係の中でケア力を自覚し、ケアの担い手としての主体性を確立する	

2) 社会貢献を推進する看護実践に大切なもの

社会貢献を推進する看護実践に大切なものは、55 キーセンテンス、10 サブカテゴリーから《老いと障害による苦悩を生きる高齢者とその苦悩に寄り添い共揺れする》、《老いと障害による内的体験を鵜呑みにせず真のニーズを捉える感受性を研ぎ澄まし実践する》、《患者 - 看護師関係を超越して取り巻く人々の力を借りその人らしさを見いだす実践を継続する》、《当事者のケア力を信頼し、ともに育ちあい喜び協奏者として看護実践を磨く》の4 カテゴリーが導かれた(表2)。

D氏は、「同じ病気を抱える人に、自分の生活の状況を伝えて、将来動けなくなってもこんな暮らしができるという希望になりたい」という思いがある。関係者にその思いを伝えたこともあるが取り合ってもらえなかった経験があり、ケアの受け手に終始していた。看護師は、様々な困難に向き合い「人が生きることとはどういうことか」を考え続けてきたD氏が行う情報発信の価値を支持し、一緒に活動することとした。D氏は、SNSを活用した情報発信を看護師から提案されると、待っていたと言わんばかりに笑顔で「いいね。やろう!」と即答した。そして、SNSの使い方についての看護師の説明を真剣に聞いた。D氏は、顎でレバーを操作してパソコンの文字入力を行うため、少しの文章を打つのに数時間かかるが、SNSに掲載したい内容を、看護師に頻りにメールで知らせるなど、障害を抱える当事者への情報発信の技術習得に向け、全力投球した。看護師は、D氏の没頭している様子を感じ、D氏のどこにそんなエネルギーがあるのかと勢いに圧倒されながらも、D氏の相棒になった気分で共同作業を楽しんだ。そして、D氏の意欲が持続するようタイミングを逃さず、具体的な行動の段取りを提示し、情報発信の活動を手抜きせず支援し続けた。

そのように、D氏は、活動の糸口が見つかったと、その活動を加速させた。看護師は、いつもは穏やかに振る舞うD氏の活動的な人柄に触れ、驚きながらも、D氏のその人らしさを感じ、D氏の活動にどんどん自分が巻き込まれていった。高齢者の目に見えない体験世界に触れた感覚をもつことや、そのことで高齢者の新しい側面を発見することが、ケアの面白さとして実感された。

この場面における、看護実践に大切なものは、「看護師は、高齢者がやりたいことを見出した時、脇役に徹し、その実践を支えつつ、高齢者の体験世界の躍動を分かち合う他者であろうとする」という看護実践は当事者と育てることを認め協奏者にする、《当事者のケア力を信頼し、ともに育ちあい喜び協奏者として看護実践を磨く》であった。

表2 社会貢献を推進する看護実践に大切なもの

カテゴリー	サブカテゴリー	キーセンテンスの例
老いと障害による苦悩に寄り添い 共揺れする苦悩を生きる	老いと障害による 内的体験は高齢者の希望や 自信をも容易に萎えさせる ことを知覚する	C-1 看護師は、他者に見えにくい高齢者の暮らしの困り事を意識し、生き抜くエネルギーのはかなさ、危うさを知覚する
		A-1 看護師は、共有しづらい高齢者の老いの内的体験の存在を意識し、その体験に苦しみながらも、ありたい姿を追い求める高齢者の痛みを知覚する
	老いと障害による苦悩や 恐怖の只中にある高齢者を ありのまま受け入れ、 その揺れに寄り添う 他者であろうとする	A-3 看護師は、高齢者の老いに伴う内的体験の共感に努め、その苦悩の存在を認めようとする
		B-1 看護師は、高齢者が苦しいから諦めていることを共感し、それでも向き合っていく恐怖を分かち合う他者であろうとする
		C-3 看護師は、高齢者がケアの担い手と受け手を行き来する心の揺れに一喜一憂することで、高齢者のありのままを受け入れる存在であろうとする
老いと障害の内的体験に 埋もれそうになっている 高齢者のなかに、 その人らしさを発見する 感受性を研ぎ澄ます	A-1 看護師は、高齢者のちくはくに見える言動を、認知機能の低下としてだけでなく、その人らしさの発現と捉える感受性を研ぎ澄ます	
	C-1 看護師は、高齢者の隠し出す雰囲気や垣間見える人柄に敏感にキャッチし関与することで、その人柄を発見しようとする	
	老いと障害により諦める特性 を意識し、真のニーズは 何かを捉えようとする	B-1 看護師は、高齢者の言葉で語られる意味と、非言語的に語られる意味の矛盾を糸口としてつかみ取り、様々な思いが交錯している心情全体から真のニーズに接近しようとする
		D-1 看護師は、高齢者が“社会貢献できる存在”という前提で捉え、高齢者のなかにある他者への貢献意欲を発見しようとする
	老いと障害により かすんでいるありたい姿を 実践することで自信や 生きる力が引き出される ことを期待する	C-1 看護師は、高齢者の自信が重なるよう主体的な活動を喚起することで、老いを生き抜こうとする力強さの発揮を期待する
		B-2 看護師は、高齢者が自ら諦めているニーズに気づき、その苦しさから逃れられない存在であることを自覚したとき、その人らしさが立ち現れることを知る
患者—看護師関係を 超えて 取り巻く人々の力を 借り、その人らしさを 見いだす	老いと障害のある暮らしの なかで、一体感を醸成し、 実践を諦めずに継続する	D-4 看護師は、高齢者のありたい姿を実現するという共通の目的に向かって、お互いのできることを出し合い、一体感を醸成しようとする
		C-2 看護師は、暮らしが思うようにならず自信の持てない高齢者であっても諦めずその自信を醸成しようとする
	患者—看護師関係の限界を 意識し、取り巻く人々の力を 借り、その人らしさを 見出そうとする	A-2 看護師は、高齢者との間で形成するケア関係が、高齢者の一側面にしか働きかけられない限界を意識し、多様なつながりの活性化によってのみ、その人らしさが立ち現れることを知覚する
		A-5 看護師は、高齢者が老いを楽しむために、老いの内的体験から当事者同士で共有することを促進しようとする
当事者のケア力を信頼し、 ともに育ちあひ喜び、 実践を磨く	当事者としてのケア力を 信頼して取り込み、 実践の向上に努める	C-2 看護師は、老いと障害による複雑な葛藤や苦悩を共有している高齢者の共感に根ざした当事者のケア力を信頼する
		A-3 看護師は、環境と相互作用を通して発達し続ける存在である高齢者を認め、そのケア力を信頼する
	看護実践は当事者と育てる ことを認め協奏者にする	B-2 看護師は、高齢者がありたい姿を見だし、その実現に挑む時、高齢者自身に湧き上がる活力に気づき、その活力が看護師の成長を支えることを認め、委ねようとする
		D-2 看護師は、高齢者がやりたいことを見いだした時、脇役で徹し、その実践を支えつつ、高齢者の体験世界の躍動を分かち合う他者であろうとする
	実践によって体験世界の 躍動を分かち合うことで、 看護の力を知覚する	B-4 看護師は、高齢者がありたい姿を追い求めるプロセスを通して、その困難を分かち合う他者になり、癒されている自己を知覚する
		D-2 看護師は、高齢者がやりたいことを見だし、その体験世界の躍動を分かち合わせる他者になることで、ケア関係を喜び看護の力を知覚する

3) 要介護高齢者の社会貢献による生きがいづくりを推進する看護実践モデル

看護実践に大切なものカテゴリーから、看護師の姿勢・態度・意識を示すキーワードを取り出して導いた中核は、【苦悩に寄り添い共揺れ】、【真のニーズを捉える感受性】、【取り巻く人々の力を借り実践の継続】、【当事者は実践を磨く協奏者】であった。

要介護高齢者の社会貢献による生きがいづくりを推進する看護実践モデルは、看護師は【苦悩に寄り添い共揺れ】することにより信頼関係を得ていた。そして、【真のニーズを捉える感受性】を研ぎ澄まし、【取り巻く人々の力を借り実践の継続】をすることでその人らしさを見だし、【当事者は実践を磨く協奏者】として共にケアを創造していた。看護師との関わりで要介護高齢者に芽生えたと思えたモチベーションは、老いと障害による苦悩ですぐに消え去る灯火のようであった。看護師は、行きつ戻りつしながら、繰り返し要介護高齢者に対峙するという、らせん状の発展段階を得て社会貢献への意思の表出につなぐ構造があった。

< 引用文献 >

石垣和子 (2015): トランス文化の視座からみたケアリングの普遍性, 文化看護学会誌, 7(1), 36-40.
 伊牟田ゆかり, 大湾明美, 佐久川政吉, 他 (2015): 要介護高齢者の社会貢献の特徴. 老年看護学, 19(2), 66-74.
 鯨岡俊 (2005): エピソード記述入門 実践と質的研究のために, 東京大学出版会.
 Watson J (2012/2014): 稲岡文昭, 稲岡光子, 戸村道子(訳), ワトソン看護論 ヒューマンケアリングの科学, 第2版, 医学書院.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 砂川ゆかり 田場由紀 山口初代 光来出由利子 大湾明美
2. 発表標題 要介護高齢者の社会貢献を推進する看護実践に大切なもの
3. 学会等名 日本老年看護学会第27回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------